



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和六年五月 第三百三十七号

さわやかな季節なのに

このところ日常生活が崩れて、メリハリのない生活が続いています。きっとユーチューブ依存症のせいです。

ユーチューブ動画というのは、あらためて云うまでもないですが、何かを表現したい人が、自分の小さな部屋をスタジオ代わりにして、スマホなんかの小さいカメラで、好き放題に番組を作って、ネットにアップすることです。そしてその動画を世界中の人が見ることができる。別の言い方をすれば、NHKや民放などの地上波が独占的に放送しているテレビ番組を、自分一人で作れるというわけです。テレビ局などの巨大組織ではなく、自分一人ですから規制もなく何だって表現できます。

最初はパソコンでそれらを見ていたのですが、今ではテレビ画面で見られるように設定しました。ソファに寝転がって、リモコンのマイクに向かって、例えば「僧侶の説教」「宇宙の果て」などと言えば、そのテーマに沿ったユーチューブがずらっと出てきます。そんなのを見ていると、気がつくとき夜中の二時三時だったりします。

たとえば、すい臓がんを宣告された森永卓郎という経済学者は、財務省の体質について、「あの組織が、日本をいかにダメにしたか」ということを体験を含めて語っています。

また最近、四十年近く前の日本航空百二十三便が御巢鷹山に墜落して、坂本九さんや五百二十人の死者を出した事故を調べていて、様々な証拠によって「あれは自衛隊のミサイル訓練のミスによって引き起こされた事件ではないか」という疑問を語り始めています。こんなことは地上波のテレビでは決して言えないことです。

あるいはまた、元農水省の官僚だった鈴木宜弘氏は、日本が食料危機の時代に入っていることを訴えています。地方の田んぼが年々荒地になって、お米が作られなくなっています。そのことは私も彦根の農村で身近に実感しています。市場価格で、一俵一万円もしない米を、農家は一万五千円以上かけて作っています。これでは農家がなくなってしまうのも無理はありません。

なぜ政府は、大切な食べ物を作っている農家や酪農家を守ろうとしないのでしょうか。鈴木氏によると、「アメリカの農産物の巨大企業が、関税を低くして、肥料や野菜の種や牛肉やヒヨコまでも安く日本に売り込んで、日本の農業や酪農をコントロールしている。もっとひどいのは、肥料の中に、アメリカでは使用禁止になっている薬品を混ぜて平気で日本に輸出している」とのことです。

最近、ゲノム編集されたアメリカのトマトが大量に日本に輸入されているそうです。これは安全性が確認されていませんから、もちろんアメリカでは販売されていません。それを日本の高齢者施設や小学校の給食に無料で提供して、いわば日本人を使って安全性の実験をしているようなものだ、と鈴木氏は語っています。

私が小学生のころ、アメリカの余剰穀物で作られたまずいパンと、吐き気がしそうな脱脂粉乳を給食で飲まされていました。あまりにまずくて飲めなくて泣いたことを今でも覚えています。運動会や遠足の時には、コカ・コーラが無料で配布されて、さすがに「なんで？」と思ったものです。

戦後アメリカの食料戦略によって「米を食べるとバカになる」と宣伝され、無理やり米からパンに主食を変えさせられたという過去があります。その戦略は今も変わっていないようです。

こんな動画ばかりを見ると、やけに腹が立ってきて、この先どうなるのだろうか、と気が滅入ります。さわやかな五月の季節だというのに。

死ぬってなんだろう（NHKドラマ「お別れホスピタル」）

主人公（岸井ゆきのさん）は、病院で働く若い看護師。病院といっても難病や終末期の患者さんが多く入院している療養病棟が職場。

彼女は家を出て一人暮らしをしている。家には母と妹がいて、妹は中学の時にいじめを受け不登校になり、摂食障害になり自傷行為を繰り返し、暴力をふるっては母を悩ませている。二十八歳なのに「生きているのが辛い」と言う。主人公の彼女が家を出たのは、その妹のせいではなく、母親の心の中に、自分の存在が薄く感じられたからだと思っている。母親はそんなこと気づきもしない。だけど彼女にとっては、そのことが重くのしかかる。だから家を出た。

エピソード（一）

五十代の元氣そうで明るい男性が入院してきた。胃がん末期の患者。ある日、その男性と看護師の彼女が病院の屋上で海を見ながら会話する。

「俺って、このあとどうなるのかなあ。痛みが出てきたらモルヒネかなんか打つだろう？そのあとどうなるのかなあ」

突然の問いかけに、彼女はなにも答えられない。死んでいった患者さんたちのことか、思い浮かんだのかもしれない。そして何も答えず沈黙してしまった。元氣そうでいるけど不安の真ただ中にいる男性のストレートな問いかけに、彼女は答える言葉を探せなかった。数日後、彼は病院の屋上から飛び降りて自死した。そばには、好きだったタバコの吸い殻が落ちていた、

その出来事が彼女をずっと苦しめる。あの時、嘘でも良いから希望につながる返事を

すべきだったのではないか？意識がはっきりしている患者が生きる希望を持てなくなったとき、生きていく気力を持てるのだろうか？そこまで追い詰められた経験のない私にはわからない。

エピソード(二)

肺炎を患って認知症の高齢の患者が入院してきた。以前、二年ほど在宅で妻が介護していたが、認知症による夫の暴力に耐えきれず入院を決めた。しばらくして肺炎が悪化し、医者が「このままだとあと数日の命です。人工呼吸器をつける手術をすれば、しばらくは大丈夫です。どちらかを選んでください」と妻に判断をゆだねる。妻（泉ピン子さん）は思い悩んで、そして手術による延命を選択した。その理由を語る場面があった。

「夫は認知症になる前は、とてもやさしい穏やかな人だったんですよ。今は暴力をふるって、私をのしる言葉を投げかけて、病気だとわかっていても、夫を憎むようにすらなってしまうした。このままの気持ちで夫を見送ることなんて私はしたくない。呼吸器をつけて植物状態になっても、夫への憎しみの気持ちが無くなって見送りたいのです。」

手術後、意識を無くしベッドに眠っている夫の手をさすりながら、昔のやさしかった頃の夫を思い描いている。そして数日後、妻は夫のそばで、おだやかに眠るように亡くなっていた。妻は亡くなる前、「延命手術を頼んだ自分の判断は、私のエゴだったかもしれない」と語っていた。そして植物状態の夫が残された。

エピソード(三)

認知症の高齢男性が入院してきた。彼は七年ほど自宅で妻に介護されていた。入院しても妻（高橋恵子さん）が、かいがいしく世話をしている。夫は事あるごとに妻の名を呼んで、妻は彼の望む通りの世話をする。看護師たちは「とても仲の良い夫婦」と思う。娘も、両親が理想の夫婦だと語っている。しかし妻はある日、主人公の看護師に打ち明ける。

「私は結婚して五十年になるけど、本当に夫を愛していたのだろうか」「夫は私のことをまるで自分の分身のように思っている。自分の気分が良い時は、きつと妻もそう思っているに違いないと思っている。妻の私が別の人格をもっていることなど考えもしない。」認知症の夫のわがままに付き合いながら、彼女は次第に夫の心から離れていく。良き妻を演じることに、もう疲れてきたと自分で思う。

夫の死期を前にして彼女は心が動かない。苦しむ夫を前にして、妻は病室のすみでじつと座ったまま。そしておもむろに近づいて夫の枕カバーを取り換えてあげて、最後に耳元でささやく。「はやく逝ってください」

そばで聞いてしまった主人公の若い看護師は、顔が凍りついてしまう。

「こんなに仲が良く見えた夫婦なのに、なんで最後にこんな言葉を彼女は言ってしまったのか？」と。

現実の夫婦の間で、夫の死期にこんな言葉をいう妻は多分いないと思います。だけど

心の奥は別物。ドラマでは心の底の思いをセリフにできる。だけど心の底の思いだって当てにはならない、時々変わるものだから。それにしても衝撃な言葉でした。

自らの五十年の結婚生活を、言葉として否定した彼女は、今後どんな余生を送るのでしょうか。

死ぬってなんだろう

主人公は、病院で多くの患者を看取りながら、「死ぬってなんだろう」と思う。居酒屋で焼き鳥をほお張りながらビールを飲みながら思う。私だって焼き鳥を食べ酒を呑んで考えることはあるけれど、答えなんか出てこない。

そもそも「死」の意味を考えるのは、仏教の一大テーマでもあります。お葬式で、「死とは命のふるさとである浄土へ帰ることです」などと話することはあります。でも本当にそうなのかはわかりません。たぶん、死は私の考えや意識を越えたものです。ですから答えなどありません。私の意識が死の意味をとらえられるように、無理やり言葉にして、物語にただけのようなものです。

話が変わりますが、昔、トルコの小さな田舎を旅していた時、行きかう穏やかな表情の村人を眺めながら、ふと「なぜ私はこのつつましく生きている村に生まれなかったのだろう」と思ったことがあります。「なぜ、この村ではなく東の果ての日本という国で生まれてしまったのだろう」その問いかけの答えはもちろんありません。ただ「ふしぎだなあ」と思うだけです。

もう少し云うと、人間がこの世に生を受け、そして死んでいくことの理由は、人間の考える範囲を超えているのだと思います。まるで小さな深い井戸の中にいるカエルが、いくら飛び跳ねようともがいてみても、決して外へ出られないように、「死ぬ」とか「生まれ生きる」ということの意味は分からないのです。仏教は、それを『不可思議』という言葉で表現します。

死ぬっていうのは、人間の考えの及ばないことです。そしてそれにもかかわらず、なぜか人間は何千年にもわたってその意味を問い続けています。

どんな生き方をしようと、「不思議だなあ」とひそかにこころの奥底で感じることに、それ以外に受け止めようがありません。本当はそれだけで十分なのです。